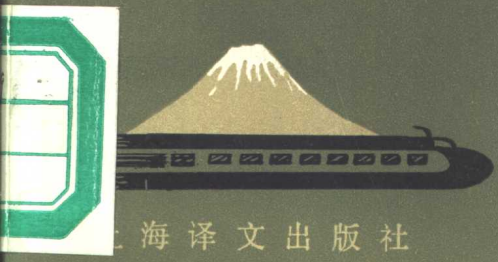
高等学校教材

中日关系史

（日语专业用）



上海译文出版社

高等学校教材

中日关系史

（日语专业用）

北京外國语学院日语系日本问题教研室编

上海译文出版社

高等学校教材
中日关系史
（日语专业用）
北京外国语学院日语系
日本问题教研室编

上海译文出版社出版、发行
上海延安中路955弄14号
全国新华书店经销
上海中华印刷厂印刷

开本 850×1156 1/32 印张 6.125 字数 142,000
1986年4月第1版 1988年3月第3次印刷
印数：6,801—8,800 册

ISBN7-5327-0270-7/H·084（课）
定价：1.10 元

编写说明

为了配合大专院校日语专业日本概况课教学，我们编写了《中日关系史》一书，以供四、五年制日语专业二年级以上的学生使用。

本书是在北京外国语学院唐则铭和大连外国语学院苏桂荃共同编写的《中日关系史》教材的基础上，经过多次修改而写成的。内容扼要地介绍了从我国秦、汉时期起，到一九七八年缔结中日和平友好条约为止的大约两千年的中日关系的历史，其中包括两国的国家关系、民间往来以及经济、文化交流等的基本情况。

本书由唐则铭执笔，北京外国语学院日本问题教研室编。书中地图、插画由外交学院李谋源同志绘制。定稿前，曾承教育部高等学校外语教材编审委员会审稿，主审人为编审委员于长江（国际关系学院）。参加审稿的有：日语教材编审组组长刘和民（大连外国语学院），编审委员陈华炎（广州外国语学院），李德（北京外国语学院），周祥岑（洛阳外国语学院），李名佑（广州外国语学院）等同志。

本书在多次修改过程中，曾得到中国中日关系史研究会副会长赵安博，北京大学周一良，北京大学亚非研究所程万里，洛阳外国语学院尹敬章，东北师范大学王魁喜、李永夏，中国国际交流学会段源培等同志以及日本著名历史学家井上清先生的热情帮助。此外，我们还收到一些研究所和高等学校的同志提出的宝贵意见。因篇幅所限，不在这里一一列举。我们在此一并向上述同志和单位表示深切谢意。

由于编者水平有限，难免会有疏漏或错误，欢迎读者批评指正。

北京外国语学院日语系日本问题教研室

一九八六年一月

目　次

第一章　初期の往来と文化交流……1

第1節　一衣帯水の隣国……1
第2節　交流の始まり……2
第3節　漢と倭国の往来……6
第4節　魏と邪馬台国の往来……9
第5節　大和国家と新しい文化の吸収……11
第6節　初期の交流の歴史的意義……15

第二章　隋・唐時代の友好往来と文化交流……18

第1節　隋・日間の友好往来……18
第2節　唐・日間の友好往来……23
第3節　遣唐使のコース……30
第4節　唐の諸制度が日本に与えた影響……33
第5節　唐・日間の文化交流……36
第6節　鑑真と阿倍仲麻呂……43
第7節　隋・唐時代における中日友好関係の歴史的意義……46

第三章　五代十国と宋代の中日関係……48

第1節　五代十国の時期の中日関係……48
第2節　宋・日間の貿易……49
第3節　入宋僧と宋・日文化交流……52

第四章　元・明・清時代の中日関係……58

第1節　元の日本への遠征と元・日貿易……58
第2節　明・日間の国交樹立……62
第3節　勘合貿易……64

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

第4節　倭寇の横行……67
第5節　豊臣秀吉の朝鮮侵略と抗日援朝の戦い……71
第6節　徳川家康の対明交渉……73
第7節　明・日間の文化交流……76
第8節　日本の鎖国と清・日貿易……78
第9節　清・日間の文化交流……81

第五章　近代における侵略と反侵略の中日関係……86

第1節　明治維新と明治初期の日本の侵略活動……86
第2節　最初の大規模な侵略戦争——日清戦争（中日甲午戦争）……91
第3節　義和団運動に対する弾圧……95
第4節　日露戦争と東北侵略の開始……97
第5節　日本帝国主義の朝鮮併呑と辛亥革命への干渉……99
第6節　第一次世界大戦前における日本人民の反侵略闘争……101
第7節　留日学生とその革命活動……107

第六章　日本帝国主義の全面的侵略と抗日戦争……113

第1節　21か条の要求と第一次世界大戦後の日本帝国主義……113
第2節　「山東出兵」と東方会議……117
第3節　九・一八事変と上海、華北への侵略……121
第4節　七・七事変と抗日戦争の発展……125
第5節　太平洋戦争と抗日戦争の最後の段階……130
第6節　抗日の戦いに対する日本人民の支援……136

第七章　第二次世界大戦後の中日関係……140

第1節　第二次世界大戦後の中国と日本の情勢の変化……140
第2節　日本人民の日中友好運動の始まり……142

第3節　「日華平和条約」の締結と中日両国人民の「中国封じこめ」をうち破る闘争…… 146
第4節　「積みあげ方式」にもとずく経済、文化交流の発展…… 151
第5節　岸内閣の中国敵視政策と中日友好交流に対する破壊…… 156
第6節　「安保闘争」と経済・文化交流の新しい発展…… 159
第7節　佐藤内閣の中国敵視政策と日本人民の闘争…… 165
第8節　田中内閣の成立と中日国交回復…… 167
第9節　国交回復後の中日関係と中日平和友好条約の締結…… 170

中日関係史年表…… 177

第一章　初期の往来と文化交流

第1節　一衣帯水の隣国

1972年9月に発表された中日両国政府の共同声明は、「中日両国は一衣帯水の間にある隣国であり、長い伝統的友好の歴史を有する。」と述べている。この声明の指摘するように、日本は中国の東に位置する島国で、上海から日本の長崎までは、約460海里しかなく、中国の台湾省から日本の南西諸島の南端までは、わずか60海里しかない。中日両国は文字どおり「一衣帯水」の隣国である。

日本の国土は、北海道、本州、四国、九州の四つの大きな島と、3000余りの小島とからなっている。これらの島々は東北から西南に弓がたにつらなっている。

日本の面積は約37万7000平方キロで、中国の面積の約26分の1であるが、人口は1億1700万人余り(1980年現在)で、世界で第7位を占めている。

日本には、北海道にアイヌ族という少数民族がいるが、大部分は大和民族である。日本民族は偉大な民族であり、長い歴史と輝かしい文化をもち、また今日では、高い科学技術と発達した工業をもっている。

中国人民も日本人民もともに勤勉で、勇敢な人民である。中日両国間には、約2000年にわたる友好往来と文化交流の歴史があり、両国人民は長い年月にわたる友好往来をつうじて、深い友情をつ

ちかってきた。

しかし、明治維新（1868年）以後、日本で軍国主義が台頭し、とくに1894—1895年の日清戦争（中日甲午戦争）から、1945年の日本帝国主義の降服まで、約半世紀にわたって、日本軍国主義は中国を侵略し、両国の関係は敵対的な関係にあった。この時期は、両国の2000年にわたる友好往来の歴史のなかで、時間的には、きわめて短いが、しかし、両国の関係史上、もっとも暗黒な時期であった。

1949年、中華人民共和国が成立してから、1972年9月まで、中日両国間には、外交関係がうちたてられず、不正常な状態がつづいたが、両国人民間の友好往来と経済、文化交流は継続し、発展した。

1972年9月、中日両国政府は共同声明を発表し、外交関係を樹立した。このときから、中日関係は新しい段階に入った。つづいて、1978年8月、両国政府は中日平和友好条約を結び、1980年代にむけて、両国のいっそう緊密な友好、協力関係をうちたてた。

1970年代における中日両国間の友好、協力関係の発展は、両国人民の長年にわたる努力の結果であり、両国人民の根本的な利益に合致しているだけでなく、アジアと世界の平和に寄与するものである。

中日両国間の友好関係は、今後もますます発展していくであろう。これはなにびともはばむことのできない歴史の流れである。

中日両国間の友好関係が発展しつつあるときに、2000年にわたる中日関係の歴史をふりかえってみることは、両国人民の相互理解と友情を深めるうえで、有意義なことである。

第2節　交流の始まり

中日間の交流はいったい、いつから始まったのであろうか。こ

の問題を明からにするために、日本文化の発生と発展のあとを簡単にふりかえってみよう。

考古学の研究の成果によると、日本にも旧石器時代があった。旧石器時代の日本は、アジア大陸とつながっていたので、アジア大陸から日本へ、人がわたり、住みついたと推察されている。しかし、日本の旧石器時代の状況については、多くのことが、まだ謎につつまれていて、よくわからない。

今から約1万年ぐらいまえには、日本列島が形成され、日本の国土や気候も、ほぼ今日と同じようになった。それにともなって、日本に住んでいた人々の文化も新石器時代に入った。

日本の新石器時代には、縄文時代と弥生時代とがふくまれる。縄文時代には、新石器といっしょに、縄目のような模様のついた土器が出土するので、この土器を縄文式土器とよび、この時代を縄文時代とよぶようになったのである。

縄文時代は紀元前3世紀ごろまで、約8000年もつづいた。この期間、中国大陸から日本への文化の流入は、まれにはあった形跡があるが、大陸と日本列島との間の継続的な交渉はなかったと考えられる。

周知のように、中国では、今から約5000年前、黄河流域に、仰韶文化に代表される新石器時代の文化がおこったが、この文化は、すでに農業および牧畜業の基礎のうえに生まれた文化であった。そして、日本で縄文時代がつづいている間に、中国の古代文化はさらに発展し、金属器を使用し、文字が使われ、社会制度も奴隷制社会に進み、さらに初期の封建社会へと発展していった。

これに反して、日本の縄文文化は、狩猟、漁撈、採集など、自然物の獲得に基礎をおく文化で、日本では、農耕や牧畜を知らない状態

が長くつづいた。（縄文時代の晩期には、西北九州で、水稲農業をはじめた地区のあったことが、近年明らかにされている。）

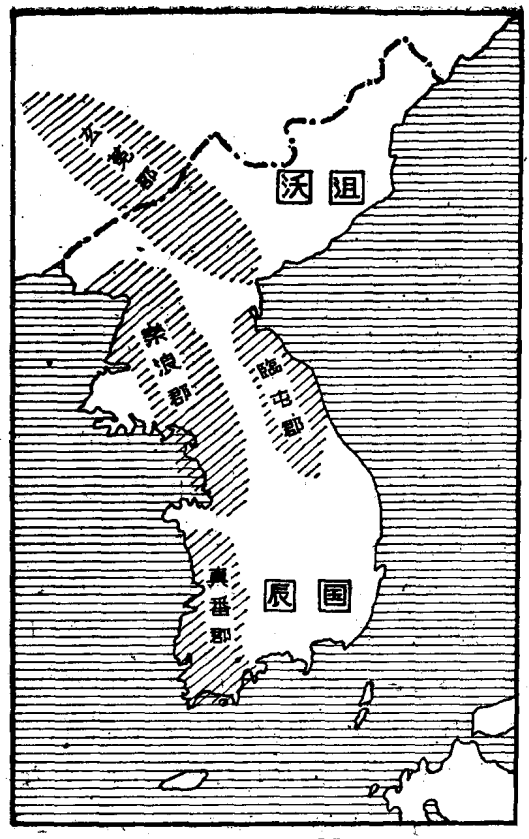
このように、新石器時代に入ってからの両国文化の発展には、ひじょうに大きなちがいがある。このような差異から見て、新石器時代には、両国間の継続的な文化交流はなかったものと判断される。当時の生産力の発展水準では、海をわたって交流することが困難だったのであろう。

ところが、その後、秦・漢時代に入ると、日本の文化にも大きな変化があらわれた。紀元前3—2世紀ごろ、日本の北九州地方に水稲（すいとう）農業と金属器の使用を特色とする新しい文化の大きな流れがおこった。この文化は縄文式土器よりもずっと高い技術でつくられた土器をもっていた。この土器は1884年、東京の弥生町（やよいちょう）というところで最初に発見されたので、弥生式土器とよばれ、この新しい文化を弥生文化という。

当時、中国では、紀元前221年に東アジアで最初の統一国家である秦がうちたてられた。秦朝はわずか15年で滅んだが、つづいて樹立された漢朝は、さらに強大な一大封建帝国に発展した。秦、漢王朝の成立は、中国の歴史上、最初の大統一国家の出現を意味するもので、それは周囲の諸地域に大きな影響を与えた。漢の武帝（BC156—BC87）は、紀元前108年に朝鮮の西北部を支配し、ここに楽浪（らくろう）、真番（しんばん）、臨屯（りんとん）、玄菟（げんと）の四つの郡を置いた。こうして、中国文化の影響は東方の諸地域にもひろがり、各地に農耕と金属器をもった文化が発展していった。弥生文化は、こうした情勢のもとで、中国文化の影響を受けながら発展したのである。

では、中国文化はどのような経路をたどって日本に伝わったのであろうか。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com



漢の四郡

日本に伝えられた水稲農業は、中国の南方や山東半島などで行われていたもので、それが日本の北九州地方に伝わったものである。その経路については、朝鮮南部を経て、日本に伝わったという説と、中国から直接日本に伝わったという説とがあり、今のところどちらとも確定しがたい。しかし、弥生文化を形成するそのほかのいろいろの要素は、朝鮮南部を経て日本に伝わったものが多い。したがって、それは、多分に朝鮮的な特色をもったものであった。

北九州地方では、弥生時代の遺物として、朝鮮南部と同じ形式の墓や朝鮮製の青銅器などが、しばしば発見されるが、これは、その当時、朝鮮南部から北九州に移住した人が少なくなかったことを物語っており、こうした人々が弥生文化を形成する諸要素を日本に伝えたものと思われる。

このように見てくると、中日間の恒常的な文化交流は、日本での弥生文化の発生とともに始まったと見ることができる。それは紀元前3～2世紀ごろのことであり、今から2000年以上もまえのことである。

弥生時代は紀元3世紀ごろまで、約500—600年つづいたが、この間に水稲農業は急速に日本の全国各地に普及し（東北地方の一部と北海道を除く）、社会の生産力は大いに発展した。人口もふえ、100戸、200戸もの大きな集落が形成されるようになり、穀物の貯蔵も行われるようになった。生産力が発展し、剰余生産物の生産が可能になってくると、搾取が生まれ、階級への分裂がめばえてきた。有力な共同体が他の共同体を屈服させて、貢納をとりたてたり、他の共同体の成員を奴隷にしたりするようになった。それとともに、共同体の首長がその支配者に転化した。こうして、日本でも、紀元前1世紀ごろには、北九州や西日本の各地に小国家が生まれ、分立するようになった。それにともなって、中日関係も、国家間の往来、交流へと発展していった。

第3節　漢と倭国の往来

弥生文化が日本各地にひろがるなかで、中日間の直接の往来もだんだん行われるようになった。

中国の古い歴史書「史記」には、徐市（徐福とも書く）が不老不死

の薬をさがしに出かけたまま、ついに帰ってこなかったという記録がある①。そこから次のような伝説が生まれた。

徐市は多くの少年少女をつれて海路出発したが、不老不死の薬を見つけだすことができなかった。もし、そのまま帰国すれば、処刑されるので、これをおそれた徐市は、海上を漂流したあげく、日本の紀伊半島に上陸し、その附近に定住したというのである。

この伝説は、日本にも伝わっている。徐市がほんとうに日本に定住したかどうかはよくわからないが、この伝説は、秦の時代に、中国から日本に渡航した者がいたことを暗示している。

漢の時代になると、日本が漢に使者を送ったことが、中国の歴史書のなかに記録されている。

「漢書・地理志」によると、「楽浪海中に倭人有り、分れて百余国を為す、歳時を以て来り献見すと云う」② と記されている。この記録から見ると、当時、北九州の小国家は楽浪郡の漢王朝の役所に、定期的に使者を派遣していたようである。すでに述べたように、前漢の武帝が楽浪郡などを設けたのは、紀元前108年であり、前漢が滅亡したのは紀元8年であるから、この記録は紀元前1世紀の後半ごろの状況を伝えているものと思われる。

また「後漢書・東夷伝」によると、建武中元2年(紀元57年)に、倭の奴国王が後漢の光武帝(BC6—AD57)に朝貢の使者を送り、これに対して、光武帝が金印をさずけたこと、また安帝(95—125)の

---

① 「史記」のなかの記載は次のとおり。

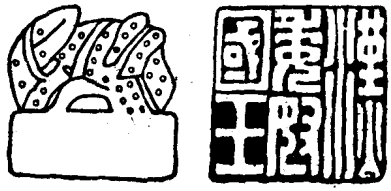
既已，齊人徐市等上書，言海中有三神山，名曰蓬萊、方丈、瀛洲，僊人居之。請得齋戒，與童男女求之。於是遣徐市發童男女數千人，入海求僊人。(«史記・秦始皇本紀»)

② 「漢書・地理志」のなかの記載は次のとおり。

樂浪海中有倭人，分爲百餘國，以歲時來獻見云。

永初元年(紀元107年)に倭の国王たちが、奴隷160人を献上したこと①が記されている。

一方、日本では、1784年に福岡県志賀島から、光武帝が奴国王に与えたと思われる金印がほり出された。これは、たて、横、高さが約2.3センチで、「漢委奴国王」ときざんであった。これから見て、奴国は日本の今の福岡市附近にあったと推察される。



漢委奴国王の金印

「漢書」や「後漢書」のこれらの記録から見て、1世紀前後の九州地方には、多くの小国があり、それらの小国は、漢王朝に朝貢することによって先進的文化を吸収するとともに、漢王朝から自分の権力を認めてもらい、そうすることによって、自分の権力をいっそう強化しようとしたようである。

北九州の弥生時代の墓地を発掘すると、そのなかから漢代の銅鏡などがしばしば発見される。これは、その当時、倭国人が漢王朝にさかんに使者を送って、文化交流につとめていたことを示している。

---

① 「後漢書・東夷伝」のなかの記載は次のとおり。

建武中元二年，倭奴國奉貢朝賀，使人自稱大夫，倭國之極南界也，光武賜以印綬。安帝永初元年，倭國王帥升等獻生口百六十人，願請見。

第4節　魏と邪馬台国の往来

中国の歴史書のなかには、2世紀中の中日間の往来に関する記載がない。したがって、2世紀中にはたして中日間の往来があったのかどうか不明である。2世紀の後半には、中国では、黄巾農民の大蜂起があり、後漢の力はいちじるしく衰退し、220年に滅亡した。『三国志・魏書・東夷伝』の記載によると、2世紀の後半から、日本の小国家間で戦争がつづいたようである。そうだとすれば、2世紀の後半には、中日両国とも戦乱がつづき、両国間の往来は一時跡絶えたのかも知れない。

後漢が滅亡したのち、三国時代に入るが、三国時代になると、中国の魏国と日本の邪馬台国との間で往来が行われた。

『三国志・魏書・東夷伝』によると、2世紀の後半から、倭人の国々はたがいに戦ったが、呪術に長じた卑弥呼という女を女王にしたところ戦乱は治まったということである。この女王は邪馬台国にいて、その下に28の小国を支配し、使者を朝鮮などに送って、外交活動をも行っていたようである。

同書によると、卑弥呼は239年に、はじめて魏王朝に朝貢した。このとき、邪馬台国の使者は、男奴隷4人、女奴隷6人、斑布などを献上し、魏王朝は錦、金、刀、銅鏡などを贈り、卑弥呼に「親魏倭王」の称号と金印を与えたということである。卑弥呼は、その後も243、245、247年と3回にわたって使者を送り、247年の使者は、その敵対勢力である狗奴国（邪馬台国の南にあった国）との戦闘の状況を魏王朝に報告している。また、魏の方は245年、詔と軍旗をさずけ、さらに、247年に張政という役人を使者として邪馬台国に派遣し、卑弥呼をはげました。魏王朝が、こんなに力を入れて邪馬台

国を支援したのは、狗奴国のうしろに呉国がついていたからだという説もある。

『魏書』によると、卑弥呼が病死したのち、卑弥呼の弟が王となったが、国内は治(おさ)まらなかった。そこで、卑弥呼の一族の壱与(いよ)という13歳の少女を女王にしたところ、国中がおだやかになったということである。

壱与が女王になると、卑弥呼と同じように魏に朝貢したが、このとき、使者の張政は魏に帰国した。その後、魏は265年に滅亡し、晋(西晋)がこれにかわったが、『晋書』によると、266年に倭の女王が朝貢してきたことが記載されている。この倭の女王は、壱与ではないかと推察されている。

以上のような往来の経過から見て、魏と邪馬台国との関係は、そうとうに密接であったといえよう。

ところで、邪馬台国が日本のどこにあったかということは、まだはっきりしていない。この問題について、日本の歴史学者の間で長い間論争されてきた。北九州にあったという見解と、近畿地方にあったという見解とが対立しているが、まだ、結論がおりていない。しかし、いずれにしても、3世紀の日本では、小国分立の状態のなかから、有力な国があらわれて、他の国々を征服し、全国を統一しつつあったと見ることができる。

266年以後、中国の歴史書のなかから、しばらく日本に関する記載がなくなり、約150年後の413年になって、ようやく日本から使者が来たことが記録されている。したがって、この150年間は、中日間の往来が絶えたものと推察される。では、なぜ150年間も往来が跡絶えたのであろうか。それは、この間、中日両国とも、激(はげ)しい内戦の状態にあったからだと思われる。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com